

最後の柿の実

狭い庭に、実のなる木が何本かある。キンカン、ウメ、種類を忘れてしまったミカン類。これらは奥さんが「実のなる木がほしい」と言うので、買ってきては植えたものである。ナンテンが三本。奥さんの実家に行つたときにもらつてきて植えた。モモは、私の父が自分で食べた桃の種を植えて育てた苗木を植えた。父は亡くなつたがモモは私の胸くらいの高さになつていて、毎年きれいな花と小さな実をつけるようになつた。オリーブは、息子の嫁さんが結婚前にはじめて家に来たとき持つてきてくれた鉢植えを、一番陽当たりのいい場所に植えた。マンリョウは知らない間に庭の隅に生えていた。鳥が種を運んだのだろう。ウメは、場所を移動したら元気がなくなり半ばあきらめていたが奇跡的に復活した。それぞれの木にドラマがある。

そんな中で、実のなる木の王者はなんと言つてもカキである。富有柿の苗木を買って植えたのだが、今では三メートルくらいの高さになり、たくさんの実をつけてくれる。正確に言うと、一年おきにたくさんの実をつけてくれている。

多い年は百二十くらいの実がつく。実が色づいた頃から、毎朝五個以内と決めて収穫をしては奥さんに献上するのが日課になつていて、毎日食後のデザートになる。

毎朝収穫をしていくと、数が減つていくにつれて大きさと色合いが良くなり、味も良くなつていく。十二月に入つて残り二十くらいになつたとき、奥さんが「いちばん高いところになつている実は採つてはいけないよ」と言う。たくさん収穫できて私たちを喜ばせてくれたことへの感謝として、自然に返すために残しておくのだという。

そうこうして、とうとう最後の一個になつた。葉はすべて落ち、木の一番高いところで日に日に熟して、十二月の青い空に浮かんでいるように見える。庭にやつてくる鳥たちも遠慮したらしく、一週間ほどそのままであつた。

ある日の朝、庭に出てみると最後の柿の実は食べられていた。よほど旨かつたのだろう。見事な食べかたである。

さつそく奥さんに報告すると、「それはよかつた、よかつた」と、なぜか大喜びなのだった。